関係性（家族間・世代間）としての生涯発達
——ナラティヴ・アプローチからその変化プロセスを捉える—

荘島 幸子・竹家 一美・鮫島 輝美・西山 直子

1．はじめに

今日、個人や家族、日本社会を取り巻くさまざまな状況が、急速に変化を遂げる中で、改めて人間の発達を捉え直そうとする試みが盛んになされてきている。乳幼児・児童・青年を対象として、身体的・精神的・社会的成長に伴う変化を見ることを目的としていた従来の発達心理学は、中年期・老年期まで広げて、認知的にも学的知だけでなく生活知のあり方として多面的知能の面から、生活史・伝記的要素も取り入れて個人特異的要因を考慮した多面的な人間理解を行おうとする生涯発達心理学視点を取り入れることで、人間が生涯を通して社会のなかで生きていく営みを捉えることが可能になりつつある。また、生涯発達研究に大きく寄与したアイデンティティ論者のエリクソンは、個人の自我が他者との相互的な関わりの中から現われることを強調し、人格発達における他者との関係性の役割を重視した。

しかし、個人を他者との関係から捉えんとする研究は、近年になってようやく萌芽的段階を迎えつつあるといえ、個人のあり方にとって他者との関係性が持つ意味が今後ますます重要視されるようになることが予想される。

2．研究目的

本研究では、家族（親子関係や夫婦関係）や世代（祖母－母－娘など）という他者との関係性を取り上げ、そのような関わりのなかで営まれる人の生涯発達を捉えることを目的とした。具体例として、①性別を移行しようとする子どものいる家族（荘島）、②子どもを持たない、特に、不妊治療を経て「子どものいない人生」を選択した夫婦（竹家）、③在宅で高齢者を介護する家族やそれを支えようとする住民といった地域における特殊な関係性（鮫島）や、④母系に注目した世代間関係（西山）を研究テーマとして扱った。このようなテーマを研究に取り上げることで、人が時間の流れのなかで他者とともに変化していくプロセスを明らかにすることを目指した。

3．研究方法

他者との関係性ならびにその関わりのなかに生きる人々をすくい取る研究アプローチとして、本研究ではナラティヴ・アプローチの方法に依拠した。その理由として、ある個人のナラティヴは、相互行為のなかで語られるため、本質的に個は他者に媒介され、関係概念とみなされるということが挙げられる（自己が個ではなく、他者を媒介に生成されるという考えは、多くの哲学に共通する自己観である）。また、ここでの他者とは具体的な他者だけではなく、文化や社会といった歴史的文脈も包含している。このような視点は、まさに生涯発達心理学における「人が、時間の流れのなかで他者とともに変化していくプロセス」を扱うという目的と合致するものである。

以下では、本研究開発コロキアムのメンバーが、コロキアムを通じて行った各研究成果について順にみていく。

4．結果と考察

結果と考察では、本研究開発コロキアムのメンバーが各自で行った研究成果について報告する。（1）では、性別を移行しようとする子どものいる家族として、「性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し」の研究結果と考察を述べる。（2）では、子どもを持たない夫婦として、「子どものいない夫婦関係の生涯発達：当事者が語る不妊経験による変化と意味」の研究を報告する。（3）では、アクションリサーチを土台とした地域での「高齢者が支えあう住民運動」について検討する。（4）では、母系の世代間関係に着目して、「母世代から見た祖母―母―娘三代の関係性：イメージ画とインタビューを通して」と題した研究の概要を述べる。

（1）性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し

本研究は，身体に対する強烈な違和感から，身体的性別を変更することを望む我が子（出生時の性別:女性，A）から「私は性同一性障害者であり、将来は外科的手術を行い、身体的に男性になる」とカミングアウトを受けた母親（M）による経験の語り直しに焦点を当てた事例研究である。これまで、性的少数者の子からのカミングアウトに対して家族が否定的に反応する事態を検討したものとして，家族の心理的反応に関する研究が行われてきた。そこでは，子の受容に至るまでの段階説モデルが唱えられてきた。しかし，「受容」や「適応」といった段階が，家族のいかなる心理状況を指し示しているのかは不明であり，それがいかに達成されるのかも明らかにされていない。また，一義的に目指すべきものとして「受容」や「適応」が設定されている点にも問題があるといわざるをえない。むしろ，問うべきは，子からのカミングアウトに際して，これまで見知ったことも自らが経験したこともない独特な発達過程をもつ我が子と直面した親が，子

への暴力行為にも及びかねないほどの状況を意味づけ，語り直す（retelling）過程ではないだろうか。子からのカミングアウトは家族にとって否定的意味を伴うものであり，また異他なる子との出会い（それが恥の感覚を湧き上がらせる）ともいえる不測の出来事であるだけでなく，親自身のこれまでの生き方が問われ，新しい自己および子との関係性の立て直しが必要となる生涯発達的局面であると結論づけられる。子からのカミングアウトを境にして異他なる我が子との決定的出会いを果たした親が，その出来事を自身の人生と関連させながらいかに語り直していくのかを丹念に解きほぐすことで，親の物語の変容過程および親子関係の再編過程を明らかにできる。本研究は，一般的な親－子関係の成立過程では見過ごされがちな親子の生涯発達を親の語り直しから明るみにだそうとする試みでもある。

子からカミングアウトを受けて2年が経過した第1回インタビュー時に，「性別移行を望む我が子を簡単には受け入れることができない」と語っていた母親1名に対し，約1年半の間に3回のインタビューを行った。分析の視点は、【視点1：Aについての語り直しの状況】、【視点2：構成されるMの物語】、【視点3：語りの結び直し】の3つであった。A－Mの関係性は、3回のインタビューを経て良好なものへと変化していた。

分析の結果、Mが語り直しのなかで、親であることを問い直しながら自らの経験を再編し、M自身の人生の物語を再構成していった過程が明らかにされた。Aについての語りの内容やAがTG者であることの理解が大幅に促進されるようなこともみられなかったが，MとAの双方の語りからは母子の関係性に明白な変化がみられた（挨拶をする程度でめったに会わない関係性から，お互いを気遣う関係性へ）。この関係性変化の背景の1つとして，本研究では，【視点1：Aについての語り直し】および【視点2：構成されるMの物語】という2つの分析視点を持ったことで，Mが語り直しのなかで親であることを問い直しながら自らの経験を再編し，M 自身の人生の物語を再構成していった過程が明らかにされた。性別移行を希望する者からカミングアウトを受けた親は自分自身の過去に遡っていくというGriffin, Wirth & Wirth (1996) の主張は，Mの事例にも認められた。語りを生成する際には、他者（周囲の他者／聞き手としての他者）が重要であることが見出された。「受容」は，性的少数者である我が子のあるがままの姿を受け入れることや子の障害に対する価値観の変化にはとどまらず，親子それぞれの人生の再構成であり，関係性の再編である。その過程においては，Mのように，親として関わってきた，親として関われないという拮抗する物語が両行しうることが見出された。つまり、従来の段階モデルを超えて、自責の念や悔いといった語り直しから母親の生涯発達を捉えることが可能になったということである。本研究は、また同時に、危機的な親子関係をいかに取り結んでいくのかを考える上で重大な問題を提起しているといえる。さらに、Mの語り直しを促進させ，親物語の構成を下支えする1つの軸となる役割を担う存在として聞き手を位置づけた点も新たな試みといえる。

今後は，個々の事例への理解を深めると同時に，検討事例数を増やし，多様な状況に

おいて危機的な親子関係に対する介入が必要であるか，必要ならばいかに介入可能か検討を深める必要がある。本研究で見出された個人の生涯発達的観点を導入した介入モデルや，家族関係を視野に入れた関係性支援モデルを模索していきたい。

（2）子どものいない夫婦関係の生涯発達：当事者が語る不妊経験による変化と意味

近年、不妊治療技術はめざましく進展し、不妊の夫婦に大きな光明をもたらしている。しかし、不妊治療の行く末は一様ではない。夫婦という視点からみれば、不妊治療の末に子どもを得る夫婦、養子縁組をする夫婦、あるいは夫婦2人の生活の選択など多様な人生に出会うための道のりといえよう。これまで不妊に関する研究は、主に個人が対象とされ、多くは、直接身体に医療技術を施される女性の心理過程に焦点があてられてきた。特に、不妊症患者をケアする立場の看護学研究は、不妊原因の如何にかかわらず圧倒的に葛藤が深い妻の苦悩をいち早く指摘し、心理的ケアの重要性を主張してきた。このような看護学研究は、その成果を医療現場で活用しうる実践性において十分価値がある。ただし、現実には不妊治療を受けても子どもに恵まれない夫婦は決して少なくない。治療中の苦悩や葛藤が患者の心身を苛むことは事実であり、重く受け止めなければならないが、一方で、子どもを得られぬまま患者を降りた夫婦に、苦悩や葛藤がつきまとうことも容易に想像できる。なぜなら、彼ら当事者は「不妊」によって普通に子どもを持つ人生を失い、「不妊治療断念」によって子どもを持つ人生を失う、という二重の喪失を経験するからである。しかし、不妊治療後の当事者の人生に関心が持たれることは少なく、あっても女性（妻）のみを対象としたものが目立ち、夫婦関係における不妊体験の相互作用や心理過程の詳細を明らかにしたものは、ほとんど見当たらない。

そこで本研究では、不妊経験が夫婦関係においてどのようなプロセスを辿り、現在どのように意味づけられているのかという視点から、夫婦関係の変化・発達の様相を探り、子どものいない夫婦の関係性の生涯発達について理解を深めたいと考える。

方法は、竹家(2008)で得た半構造化面接による9つのナラティヴ・テクストと、本研究のために新たに得た、主に夫婦関係の変化プロセスの観点から語ってもらった2つの不妊経験のナラティヴ・テクストを用い、質的に分析した。竹家(2008)の協力者は女性9名で、年齢は29～48(平均39)歳、不妊治療受診期間は9ヶ月～7(平均3)年、治療断念からの経過年数は半年～12(平均5)年である。これらの語りデータは2004年9～12月に収集されたものであり、その際の研究目的は、彼女たちがどのような心理的プロセスを辿って「子どもを持たない人生」を選択するに至ったのかを検討することと、その経験による価値観の変容を探索し、当事者の経験の意味づけを考察することであった。他方、新たな語りデータは36歳と47歳の女性2名によるもので、その受診期間は約2年と5年、経過年数は1年弱と5年である。2008年5月と8月に筆者がインタビューを行い、全てを逐語化した。ここで、別の目的で得た過去のデータと新たなデータを同じ俎上に載せ、分析することに対しては批判もあろうかと思われる。だが、テクストに

は相対的に「脱文脈化」でき、「距離化」した場所でも利用可能という特徴がある(やまだ, 2007)。そもそも竹家(2008)は、少数の語りを対象とした事例研究であり、不妊という個別具体的な経験の意味づけを明らかにするという目的を鑑みれば、最適な方法であったと考えられる。質的研究では視点の多様性そのものは歓迎されること(やまだ, 2007)なので、同一テクストへの異なった視点からの再分析も、新たなテクストをデータとして加えることも(同じものを見ようとする同じ現象へのアプローチであれば)特に問題ないと判断する。したがって、本研究では11個のナラティヴ・テクストについて、不妊治療の前、治療～終結、終結～現在の3つの時期に分けて分析を行い、夫婦関係に関するエピソードを時系列に抽出するという手続きを採った。そして、各々を比較検討し、共通性が浮上したものはひと括りにし、時期による変化パターンを探った。また、強い独自性を表すものは、その個性を重視し考察につなげた。以下、結果が示した「夫婦関係の変化プロセス」の概要を記す([ ]は筆者によるラベル)。

①不妊治療前:男性因子の1例を除き、夫婦関係は「良好」か「普通」という認識の下、年齢や病歴を踏まえた[妊娠可能性への見積もり]が行われるが、見積もり通り進まないため[不妊疑惑]が生じ、夫婦は妻主導で[治療選択]の道を歩き始める。

②治療～終結:[コミュニケーション不全感の増大]する夫婦と、[コミュニケーション不全感無し]の夫婦に大別される。不全感の主な内容は、治療からくる「不均等感や温度差によるすれ違い」である。不妊の原因が何であっても、治療の負担が大きいのは圧倒的に妻である。原因の所在によっては、配偶者への負い目、怒りや失望を感じる夫婦や、互いを気遣う余り肝心な会話がなくなる夫婦もあった。加えて「性生活」「配偶者の親との関係」「治療前からのコミュニケーションの問題の顕在化」も生じる。一方、治療を離れて趣味や娯楽等を共有し[緩和の試み]を行う夫婦もあった。その後は、すれ違いや葛藤が臨界点に達して[危機状態に直面]する場合と、危機を経ずに治療断念に至る場合に分かれる。前者では[新しいコミュニケーションの獲得]がなされ、夫婦が一致協力するなど治療への態度が変化したケースもあったが、決定的な亀裂を生み[離婚]に至ったケースも3例あった。[コミュニケーション不全感無し]の事例では、治療自体にストレスは感じるものの夫婦関係への悪影響は認められず、その共通要因として[配偶者への肯定的感情]が示唆された。ただし、最初から[自己責任による治療]と心得、夫の関与を極力求めない方略を取った妻もいた。

③終結～現在:不妊治療経験が現在の夫婦関係にどのような影響を及ぼしているかを問うことは、経験の意味づけを捉えることである。最終的には、危機的状況を乗り越え夫婦の絆が深まったと意味づける[絆の深まり]、治療で生じた不全感が現在まで続いているがあえて夫婦としての不妊経験を直視しない[現状維持]、同じく不全感が続いているがその堆積が夫婦関係に否定的な影響を及ぼしている[葛藤継続]、一貫して不全感を経ず治療を通過点とみなし関係性に影響が現れない[影響なし]の4つの型が得られた。

以上、不妊経験による子どものいない夫婦関係の変化の流れを見てきたが、生涯発達

的には、配偶者と向き合うことの重要性が改めて示唆されたように思われる。[危機状態に直面]し[新しいコミュニケーションを獲得]した夫婦は、気持ちが分かち合えるようになり、関係が再構成される可能性が示されたからだ。今後は夫を分析対象に含めることで、解釈の偏向を検討し、より現実に即した夫婦関係の変化を把捉していきたい。

（3）高齢者が支えあう「住民運動」

本研究では、京都市上京区西陣地区における高齢者同士が支えあう住民運動を中心としたアクションリサーチ（矢守，2008，164-167）(1)について報告する。この住民運動における医療者と住民の関係性、つまり「世話する者」と「世話される者」の関係性に注目し、抽出された「明日は我が身」という語りの中の相互作用のダイナミック性について理論的考察を行う。

次に、本研究のフィールドである「ともに生きる・京都（以下、『ともに生きる』）」について簡単に説明する。「ともに生きる」の目的とは、「住民運動の発祥の地で地域連携と共生のネットワークの再構築を図り、『孤独死をなくす』こと」である。ここでの「住民運動の発祥の地」とは、戦後、同じ地区で発展した住民中心の医療運動をさす。この医療運動とは、貧しさの中、医療を満足に受けられない住民が集まり「自分たちの健康は自分たちで守る」と資金から診療所の椅子に至るまで手作りされた診療所に始まる。彼らの活動は「住民本位の医療」を貫くことが常に第一とされた。また、医療者、病院職員、住民との関係は対等であるという精神も貫いた。医師の一人は、当時の活動を振り返り「自分たちは住民から胸を張って借金をした。その代りに、体を張って何でもやった。」と語るのである。この活動は次々と現在の地域医療モデルの土台となるような運動を生み出していく。「患者会」「往診制度」「痴呆症（現：認知症）の介護」「在宅看護体制」、高齢者を支えていく「住民互助組織」の結成、さらには「介護保険」のモデル事業ともなった。しかしこのような活動も、時代の流れとともに、活動そのものが衰退していく。だがこの活動の「精神」を引き継ごうという思いを持つものたちが、代表である根津医師を中心に集まった。彼らは、介護保険問題をきっかけとして、壊れた地域住民同士のつながりを再構築することで、この「住民主体の医療」を復活させたいという。彼らが目指す地域とは、医療者・病院職員・地域住民が対等な関係を保ちながら、横のつながりを広げていくことで、社会から疎外されてしまうような状態、つまり「孤独死」をなくし、安心して暮らせる地域を創ろうとする試みだといえる。

「ともに生きる」の母体となった住民運動が、前述の医療運動の中で1979年に生まれた互助組織「堀川福祉奉仕団(以下奉仕団)」であった。1970年ごろから、病院内での高齢者の長期入院や地域の高齢化が問題となっていた。73年に老人医療費が無料化になるとさらに社会的入院が増えていった。そこで地域委員会と病院事務局とで、「地域でどうケアするか」という論議になった。当時事務局員だったSさんは、「地域で暮らせることが一番大事なことで、一番幸せなんじゃないかなって。だから、地域の中で起

こっていることは地域住民の中で解消してく、住民同士が支え合って、それを自分のこととして捉えて活動していこう、ということになった」と話す。まずは一人暮らしの高齢者を対象に、昼食会と健康講座、寝たきり老人に手縫いのオムツを送る運動を開始した。名称も「『独居の会』だとさびしいから、一人同士の人がまた寄って一緒に暮らしてもいいんだから、『独身クラブ』にしよう」ということになった。この活動を支えるために結成されたボランティアグループが「奉仕団」である。翌年から「ボランティアスクール」を開催し、参加したものが登録するという体制をとった。「ともに生きる」の参加者や世話人の中にも、このスクールの卒業生がたくさんいる。この奉仕団の活動は、一人暮らしの高齢者だけでなく、地域で高齢者を抱える家族をも孤独にはしなかった。皆が「明日は我が身」を合言葉に、介護している家族でさえ、時間の合間を見つけては、奉仕団の活動に参加するようになるのである。

ここからは、医療者と住民、つまり「世話する側」と「世話される側」の関係性に注目して考察を試みる。まず関係性を記述するために大澤(1996)の身体論を土台とし、関係のダイナミック性を記述するために北山(2006)の「傷ついた治療者」論を援用する。

まず、大澤の身体論を説明する。身体には、「互換する身体」および、「第三者の審級」という2種類の状相がある。そして、互換する身体同士の頻繁かつ濃密な互換によって、第三者の審級が擬制される。この相互に互換を繰り返している状態を「間身体的連鎖」という。互換する身体とは、身体が他の身体に「なる」ことができることであり、身体Aは、他の身体Bの部位において、「身体Bの世界」を感受することができる状態をさす。

次に、北山の「傷ついた治療者」論を説明する。精神分析の現場では、治療者はダブルバインドの状況に置かれやすい。治療者は、患者のよき理解者として存在しながら、時には治療のため否定的な対象とならざるを得ないような矛盾や患者側の病理のために心が引き裂かれるような強烈な苦しみを伴うことがある。しかし、同時にこの状態を治療者が克服することが相手の抱えている病的な状態からの脱出のきっかけともなることがある。これを「治療的矛盾」とし、この矛盾を乗り越えることによって治療が行われることを理論化・構造化した。ポイントは、精神分析の治療における治療者と患者のやり取りの中で、患者の要求してくる相手役を引き受け、治療者が劇のように演じてしまうことで自分の＜病者＞の部分を思わず露呈してしまい、その＜病者＞としての気づきが、かえって相手の中の＜治療者＞を呼び覚まし、治療へと向かっていくところにある。

この治療者と患者のやり取りがまさに「間身体的連鎖」の状態であり、治療者は患者になり、患者は治療者になっている。この「間身体的連鎖」の結果が治療者自身の＜病者＞の露呈であり、治療者自身が病んでしまい、その病を克服することで生まれた知恵によって治療者が患者に役立つ。しかし、臨床の現場では、病んだまま去っていく治療者が多い。患者が治るためには、この治療者が＜病者＞に気づき治ることが重要なので

あり、この気づきがあって初めて二者間に対等な関係を形成することが可能となる。

「ともに生きる」での世話する側、世話される側の関係がまさにこのような治療構造を持っている。世話する側の「明日は我が身」としての気づきが、世話される側の「世話人」としての主体性を呼び覚まし、世話されていた者がまた他者を世話していくといったような「環節的」に世話の連鎖を引き出すような地域を作り出しているのである。

（4）母世代から見た祖母—母—娘三代の関係性：イメージ画とインタビューを通して

本研究は、母系の世代間関係に着目し、特に中年期母世代から見た「祖母—母—娘」三代の関係性を、イメージ画とインタビューという二つの異なった形式のナラティヴを通して明らかにしようとするものである。

まず、本研究が依拠するナラティヴ・アプローチにおいて、その根本に立ち戻れば、「ナラティヴ（narrative 語り・物語）」とは、「広義の言語によって語る行為と語られたもの」を指し、ここでいう「広義の言語」には、映像・身体・建築・芸術・パフォーマンスなど、記号化されたものすべてが含まれる（やまだ，2007b）。この定義に従えば、イメージ画のような視覚的表現をも「ナラティヴ」として扱うことができる。一人一人という境界のはっきりした「個」ではなく、三代をひっくるめた全体としての「関係性」の様相を捉えるという本研究の目的に照らして、一枚の絵のなかに全体を縮約して表現することができるイメージ画という手法を採用することは、理に適っている。さらに、描かれた絵に基づくインタビューを実施することによって、調査者の側の恣意的な解釈に陥ることなく、イメージ画表現の理解をより確かなものにすることを企図した。

筆者（西山）は、先に、同様のテーマと手法で青年期娘世代 100 名を対象として、母系の世代間関係、すなわち母および母方祖母と自分との関係性を問うイメージ画調査を行っている（西山，2007）。そこで導き出された基本的な関係性パターン、すなわち、《２＋１関係》《三角関係》《並ぶ関係》《包む関係》の４つが、中年期母世代のイメージ画においても共通の構図として浮かび上がってきた。今回は、これらを用いた構図的な分析のみならず、特に「ケア」の様相を呈する絵に着目してその物語構造を分析することを試みた。というのも、娘世代の過去・現在・未来の絵の構図変化を追った際に、下に位置していた者が並び立つようになったり、包まれていた者が包むようになったりするケア役割の交代・逆転の可能性が示唆されていたため、母世代に視点を移したときにそれがどのように立ち現れるか疑問に思っていたからである。また、ライフサイクル論の観点から見ても、母世代が現在まさに生きている中年期という時期は、自らが生み出したものを気づかいはぐくむ傾性である Generativity（生成継承性）を発揮し「Care（世話・はぐくみ）」という人格的活力（virtue：徳）を身につけることがテーマだとされている（Erikson,E.H. & Erikson,J.M, 1982）。さらに、このころの母世代は、老年期の祖母の世話や介護の問題が現実味を帯びてのしかかってくる時期でもある。娘世代を育て上げた経験を有し、祖母世代の介護問題に直面するそんな母世代だからこそ、

三代の関係性のなかでのケア役割について、経験と実感に裏打ちされたリアリティーある物語を描き出せるのではないか、と考えた。ここでは、その「ケア」の様相に着目したイメージ画の分析結果を中心に三代の関係性について論じていきたい。

具体的な方法としては、娘が幼いとき・現在・未来の３枚にわけて描かれたイメージ画を並べて一枚の絵とし、絵の変遷を一連の物語ととらえ、「ケア」概念を表す典型的な例を中心に分析した。その結果、世代間のケアの方向性から、「後続世代に対する一方向的なケア」と「上下両世代に対する双方向的なケア」の二つにわけて考察された。

まず、「後続世代に対する一方向的なケア」では、祖母から母へ、母から娘へというように、先行世代から後続世代へ向かってケアが施されるさまを表されていた。これは、「育てる」という営みに代表される。一方、「上下両世代に対する双方向的なケア」には、上記の一方向的なケアに加えて、母から祖母へ、あるいは娘から母や祖母へ、というような後続世代から先行世代に対するケアも含まれ、世代と世代とのあいだでケアが巡り巡っているさまが表わされていた。ここで、下の世代から上の世代に向かうケアは、「看取る」という営みに代表される。

それぞれに見られた典型的なイメージ画の物語構造をまとめると、「後続世代に対する一方向的なケア」では、娘が幼いときには、「育てる―育てられる」という営みの中心にある母娘と、それを遠くからそっと見守る祖母の姿があった。そして、現在になると、娘は母の手から離れ一人立ちするようになる。しかし、その後も見守りというかたちでケアは続く。そして、未来には、これまで「育てられる者」であった娘が子どもを産んで「育てる者」となることが展望されていた。一方、「上下両世代に対する双方向的なケア」では、「育てる」という営みに関しては上と同じであるが、そこに、祖母をいたわるという要素が加わる。今回の調査協力者には現時点で祖母の介護に従事している人は割合少なかったが、近い将来そのときが来ることは多くの人が予想していた。そのため、未来の絵では祖母の乗る車椅子を押すなどの具体的なケア行為が描かれており、母自らが「看取る者」の役割を引き受ける決意が示されていたといえよう。

今回確認された、先行世代から後続世代へと向かうケアの方向性、すなわち「育てる」という営みは、自らが生み出したものを気づかいはぐくむという Generativity 概念そのものであり、理解しやすい。一方、後続世代から先行世代へと向かうもう一つのケアの方向性、すなわち「看取る」という営みはどうであろうか。「看取られる者」は、「看取る者」を生み出した存在である。次世代へ向かう Generativity とは方向性が逆であり、これをどのように考えたものかと思案した。ここで、そもそものケアの定義に立ち返ると、Erikson のいう“Care”は、「これまで大切に（care for）してきた人や物や観念の面倒を見る（take care of）ことへの、より広範な関与」であった。この定義に従って考えれば、「看取る」という営みに代表される先行世代へ向かうケアは、その対象である先行世代とのあいだにそれまで大切にはぐくみ培ってきた「関係性」に対するものだと読み替えることができるのではないか。世代間のケアの方向性と Generativity

との関連については、さらなる議論を要するところであり、今後筆者が取り組んでいくべきテーマでもある。

本研究により、母世代から見た三代の関係性が、visual narrative としての一連のイメージ画のなかで、「育てる—育てられる」「看取る—看取られる」というケアの営みによって取り結ばれている可能性が示唆された。最後に、世代間の「関係性」そのものの発達プロセスについては、より精緻に議論される必要性があることを指摘しておきたい。

注

(1) アクションリサーチとは、当事者と研究者の共同的実践を指す。観察や測定（研究実践）を、観察や測定の対象として措定した実践から切り離し、前者の実践が後者の実践に及ぼす影響を排除するような自然科学的な研究態度とは異なり、人間や社会を対象とした研究で用いられるものである。このような研究においては、互いの独立性を完全に保証することや対象者の反応や調査回答に及ぼす影響を完全に消去することは不可能だと端的に認め、ともに当事者として、何が望ましい社会状態かについて価値判断をし、現状のベターメントへ向けて協働する。

引用文献

Erikson,E.H. & Erikson,J.M. (1982). The Life Cycle Completed: A REVIEW. New York: W.W.Norton.〔村瀬孝雄・近藤邦夫[訳]．(2001) .ライフサイクル、その完結〈増補版〉. みすず書房.〕

Griffin, C. W., Wirth, M. J., & Wirth, A. G. (1996). Beyond acceptance: Parents of lesbians and gays talk about their experience. New York: Oxford University Press.

北山修. (2007) . 劇的な精神分析入門. みすず書房.

西山直子. (2007). 祖母—母—娘三代の関係性: イメージ画とインタビューをもとに. 平成 18 年度京都大学教育学部卒業論文（未公刊）.

大澤真幸. (1990). 身体の比較社会学 I . 勁草書房.

竹家一美. (2008). 不妊治療を経験した女性たちの語り: 「子どもを持たない人生」という選択. 質的心理学研究, 7, 118-137.

山口美和. (2007). 「＜親＞になる」ことへの物語論的アプローチ: NICU 入院児の親の語りを手がかりに. 教育学研究, 74, 28-40.

やまだようこ. (2007a). 質的研究における対話的モデル構成法: 多重の現実, ナラティヴ・テクスト, 対話的省察性. 質的心理学研究, 6, 174-194.

やまだようこ. (2007b) (編) . ナラティヴ研究 (pp54-71) . 質的心理学の方法—語りをきく. 新曜社.

矢守克也. (2008). アクションリサーチ（pp164-167）. 子安増生・二宮克美（編）心理学フロンティア. 新曜社